戸川幸夫動物文学の研究

――原型としての「高安犬物語」――

阿部真人
（国語科教育研究室）

はじめに

戸川幸夫の作家活動は、歴史小説・時代小説・伝記小説等幅広いが、なかでも動物文学の開拓者としての評価は高い。その成果は、『戸川幸夫動物文学全集』全十五巻（講談社、一九七六～七七）に一応の結実を見ているが、その創作活動は今なお続けられつつある。

ところで戸川の動物文学の処女作は、「高安犬物語」である。所属していた新鷹会の機関誌的存在の「大衆文芸」（一九五四・十二）に掲載されたものであった。翌年第三十二回直木賞を受けるに及び、戸川を世に送り出した作品となった。作家の特質は処女作に顕著であるとは、よく耳にする言葉だ。本稿では、戸川の動物文学の全体像に迫るための出発点として、処女作「高安犬物語」の特質を明らかにしたい。

一、高安犬チンの優秀性

作品の冒頭は、次のように書き始められている。

チンは、高安犬としての純血を保っていた最後の犬だった、と私はいまもって信じている。

「高安犬物語」が戸川の山形高校生時代の実話をもとに創作されたものであることは、広く知られている。作中の「私」こと田沢が作者の分身と見てよいことは、まず間違いのないところであろう。[1] 作者は冒頭において、若き日の愛犬チンへの思いの深さを、それにふさわしい主情的な文体で述べているのである。

作者のチンへの思いは、それが高安犬であることにあった。今や絶滅してしまった高安犬の、最後の純粋犬であることにあったのである。作者はチンについて筆を染める前に、まず高安犬について語っている。

高安犬というのは山形県東置賜郡高畠町高安を中心に繁殖した中型の日本犬で、主として番犬や熊猟犬に使われていた。中型の日本犬とはいっても紀州犬やアイヌ犬のようにスマートな、女性的なのと異って、犬張子を思わせるガッチリとした体つきの、戦闘的な狩猟犬だった。熊を追って幾日も幾日も雪山を彷徨出来る強い耐久力と、相手が斃れるまで喰い下る激しい闘魂、鼻を捥ぎとるような寒風の中から熊

の体臭を嗅ぎわける鋭い感覚―こういった類のない特徴を持った狩猟犬だった。だがその優秀な血も怒涛のように押し寄せてくる垂耳犬の汚れた血で次第に崩されてゆき、昭和の初めごろにはもう高安犬の発祥地である高安付近では、耳は立ち尾は捲いていても、どことなくバタ臭い犬で充満し、あの美しい古武士のような重みのある高安犬の姿は見られなくなっていた。（一三八頁）

高安犬とは「犬張子を思わせるガッチリとした体つきの、戦闘的な狩猟犬」であり、その耐久力、闘魂、感覚等において、熊猟犬として比類のない資質を持つという。それに、「美しい古武士のような重みのある高安犬」という表現も、その容姿と雰囲気をほうふつとさせてくれる。そして当然のことながら、「その犬の血統が純粋であればあるほどその性格は優秀だった。」（一四四頁）のである。

この高安犬を求めての「私」の探索は続くが、チンとの出会いの場面は次のように書かれている。

しばらく行くと田ン圃道を向うから、夕陽をカッと一ぱいに浴びて猟師風の長身の男が一頭の白い犬を連れてやってくるのに出遇った。立派な犬だった。ぴんと立った耳、犬張子のように張った胸、逞しく捲き上った尾、きっと正面を見据える刺すような瞳、悠々と力強く歩いてくるその犬を見た瞬間、私はこれこそ長い間さがし求めていたものだと感じた。

この犬がチンだった。（中略）

犬は鼻尖や背中に無数の傷痕を残していた。これが彼の純白の身体に飾られた幾多の戦歴を物語る勲章だった。（一四三頁）

この時チンは十歳であったが、飼い主の吉蔵の口を通して、これまでの熊猟犬としての生涯が紹介される。厳しい訓練に耐え得たことをはじめとし、その強さと頭の良さ、更には感覚、勘の鋭さ等が具体的事例にそくして述べられる。子熊二頭、手負い熊六頭を嚙み殺した戦果や犬鷲を仕留めたことなども、吉蔵の口から熱っぽく語られる。

やがて病に侵されたチンは、手術のために山形市の私たちの元に引き取られる。その後の交流を通してのチンの思い出が、次々と描かれる。山形市から和田村の吉蔵の家まで雪山を二十日近くもかかって帰り着き、その優秀性を実証したことから始まるが、ポリップの手術の際もチンは聡明で我慢強かった。麻酔注射もしない手術中、私たち四人が前足、後足の一本ずつを握り、最も信頼されている吉蔵がチンの頭を押さえていた。

チンは暴れなかった。自分がいま何をされようとしているか、そしてそれが絶対避けられないものであることを悟っていたかのようだった。

獣医はメスを握るとチンの赤く腫れ上っているペニスにずぶりと突立て、四寸ほど切り裂いた。鮮血がぱっとチンの銀色の毛を染めた。チンはくうと低い呻きを洩らして体を硬直させたが悲鳴はあげなかった。「チン、我慢すンだ！」

吉がまたいった。自分の肉体の一部を切り裂かれてでもいるように、吉の額には冷たい汗の粒が一面に浮かんでいた。

獣医は切り裂いた傷口から白味がかった肉塊を摑み出した。メスで癌の部分がこそぎ落とされる間もチンは歯を喰いしばってじっとしていた。早く終ってくれ――私は心に念じた。木村屋さんも正視するに堪えないのか顔をそむけ、尾関は眼を瞑っていた。

癌がこそぎ落とされるとその後に稀塩酸が塗られた。焼ける痛みにチンは再びくうという呻きをあげた。

「チン、もうすぐだ！」

吉の声は震えていた。涙ぐんでいるようだった。（一五六～一五七

頁）

チンへの賛美は、横綱を張っていた土佐闘犬との戦いぶりの見事さ、溺れた子どもを救う英雄的行為へと及んでいく。そしてそれは、そのりっぱな死に様を描くことで終わりを告げるが、その間一貫してチンの優秀さが感動的に表現されている。チンによって高安犬の子孫を残そうとして挫折した若き日の作者であったが、チンの死後二十年近くたって、文学という表現形式を得て、チンの在りし日の姿を、高安犬の優秀性をこの世にとどめ得たのであった。「高安犬物語」は、かつての愛犬チンへの作者の鎮魂曲ともいうべきものであった。

二、昇華された愛へのめざめ

高安犬の純粋犬チンへの作者の鎮魂の思いは、その優秀性を客観的に描くとともに、私たちとの交流ぶりを描くことを通して表現されている。

「私」とチンとの出会いの場面は前章に紹介したが、「私」の惚れこみように対して、チンとそれをつれた男の拒絶ぶりは対照的であった。

「写真撮らせてけねえかス」と呼びとめても、人も犬も見向きもせず、「私」を斜陽の中に取り残したまま、さっさと歩み去って行く。諦めきれずに家まで訪ねて行っても、その拒絶反応は一向に変わらなかった。が、日曜毎の訪問が度重った結果、「私」と吉蔵との間は友情で結ばれるようになったが、チンの態度は変わらなかった。

私たちはこうして新しい友達、それも心を許すことの出来る友人として村人たちの白い眼の中で手を握り合ったが、チンはいつまで経っても私への警戒を怠らなかった。「チンよ、ほら来い！」

吉がこういって両手で彼の膝を叩くとチンは若犬のように全身に喜びを現わして吉に飛びついていったが、私がいくら真似をしても〝何をこの胡散な奴めが……〟といったふうにじろりと見るだけで立ち上がろうともしなかった。（一四九頁）

ポリップの手術のために、山形市の私たちの元に引きとられたチンは、木村屋さんのパン工場の中につながれる。が、私たちの懸命な世話にもかかわらず、一週間過ぎても食事を全くとろうとしない。わずかな隙を見つけて逃走し、和田村の吉蔵の元に帰り着く。吉蔵によってつれ戻されたチンを見ての私たちの気持ちは、次のように書かれている。

私たちはこの犬の優秀さを眼のあたりに実証されてますます惚れ込んでしまった。同時にこの犬からこれ程までに慕われている吉がうらやましくてならなかった。異性に対して感じるような嫉妬を犬に対して感じたのは後にも先にもこの時だけだった。（一五五頁）

かたくななまでに私たちを拒絶し続けてきたチンであったが、私たちの真剣な愛情の通じる日がついに来る。手術が成功した数日後、散歩に連れ出したチンの鎖を木村屋さんが思い切ってはずした時であった。

「あ、チンが逃げない！」

私は思わず叫んだ。木村屋さんは満足して微笑んだ。

「チンはこれでほんとうに俺だちの犬になったんだ。いや、いま鎖を外す時、君に云わなかったけんど俺考えでたのよ。もしこえつが逃げるようだらもう逃げでもええ。俺は追っがけねえつもりだった。なあ、田沢君よ。俺だちはほんとに心がらこえつを愛したもんなァ、それでその真実が分んねえようだら馬鹿だもんな、そんな犬だらもう不要ねえと思ってたんだァ。やっぱりこえつあ大しだ犬だスや」

酷しい冬はまだ始まったばかりだが、私たちの心の中には楽しい春風が吹き出していた。（一五七頁）

チンとの交流が成立した時の私たちの心の高揚が、巧みに表現されている。

チンの世話をしながらの私たちのチンの妻探しは続くが、それが実らない前に、チンはヒラリヤでたおれる。当時「私」は、仙台の大学に進学していたが、「チンキトク」の電報を受け取って山形に駆けつけた。

木村屋さんの工場には吉が先きにきていた。

「チン」

と呼ぶとチンは重い頭をやっともたげて私を見た。そして嬉しそうに立ち上がろうとしたが、もう身体の自由を失って、よろめいた。

「いいよチン」

私はチンの傍によって彼の大きな頭を抱いてやった。チンはかすかに尻尾を振って私の掌をそっと甚めた。（一六二頁）

チンの死によって、その子孫を残したいという私たちの願望は終止符を打たれる。せめて生前の面影を剝製にして後世にとどめたいという願いも空しく、その出来栄えは無残なものであった。「可哀そうなチン。チンはもう永遠に私たちの傍を離れていったのだ。」（一六五頁）という表現に、作者の鎮魂の思いが色濃く表出されているのを感じる。

作者はチンへの鎮魂の思いを込めて、私たちとの愛情の成立について語る。チンを中心にした私たち人間同士の友情についても語る。いわば若き日の栄光ともいうべき部分である。続いて、チンの死と剝製の失敗とによって、私たちの願望が挫折していった結末が述べられる。その間を通して作者は、チンに寄せる私たちの終始変らぬ愛情を描いているが、その愛情のありようには変化が見られる。

私は今から考えるとこの時チンを和田村に返すべきだったと思う。しかし当時、私たちの感情はこの優秀な犬を金輪際手放したくはなかった。（一五七～一五八頁）

「当時」とは、ポリップの手術の成功後、チンとの愛情が成立したことを確認し、木村屋さんと喜びあった時のことである。ここには秀れたもの、愛するものを自分のものにしておきたいという激しい人間の欲求が窺える。そして、それは「私」のこれまでのチンへの感情からして、当然なことでもあった。

ほんとのことをいうと私はチンを自分だけのものにして置きたかった。チンは私が長い間探し求めていた犬であり、漸くにして見つけた犬だった。だから仲のよい犬友達だとはいってもむざむざ木村屋さんに引渡すのは残念だったが、寮住いの身には犬を飼うなどということはとうてい許されなかった。（一五一頁）

チンを吉蔵から譲り受け、「私」と木村屋さんのものとして引き取ろうとした時の「私」の心境を語ったものである。チンが木村屋さんのパン工場の中につながれているのを見た時も、次のように書かれている。

私は内心不満だった。もうチンは木村屋家のものになって了ったような気がした。（一五二頁）

その上、チンが吉蔵を慕って逃走した時には、前述したように、「異性に対して感じるような嫉妬」を押さえることの出来なかった「私」であったのである。

チンを絶対に手放したくないという私たちの感情は又、高安犬の子孫を残すという大義名分に支えられているかにも見えるが、あくまでも人間中心のものであった。チンの子孫を残すことは、和田村の吉蔵の元においても不可能ではなかったはずであるが[2]、そうした考えは全く登場してこない。私たちの感情は愛の素朴な姿を示しているともいえるが、動物の側からいえば人間のエゴといわれても仕方のないものであろう。その結果私たちの愛情にもかかわらず、「チンは都会に飼われてだんだんと本来の野性味を失い、老い込んでいった」（一五八頁）のである。そうしてその当時から年数を経た今、はじめて「この時チンを和田村に返すべきだった」（―線は筆者）という認識に到達し得ている。

こうした認識に到達し得た契機は、チンの死及び剝製の失敗にあったであろう。チンに死なれ、その子孫を残そうとする私たちの願望は絶たれた。剝製にして科学博物館に寄附し、その堂々とした姿を後世に伝えようとした努力も徒労に終わった。

これがチンであろうか、あの堂々とした美しいチンの風貌はどこに行ってしまったのだろう。いやチンというよりはこれが果して日本犬といえるであろうか。

チンの犬張子のようなガッチリと張った重厚な頬や胸は狐のように細く尖んがり、引きしまった唇は反りかえってブルドックのように醜く前歯を現わし、竹をそいだようにピンと立っていた耳は干椎茸のようにしなび、チンの愛情にうるおった瞳の代りには大きすぎるガラス玉の眼玉がはめ込まれて玩具の熊のようにおどけた表情を作りあげていた。丸味のあった体は四角な空箱と化し、肉体を支えて何時、如何なる攻撃にも対処し得るように油断のない弾力をたたえていた四肢はスリコギのように味のない四本の棒に置き代えられ、剛胆に捲き上がっていた太い総々とした捲尾は針金の環のように貧弱に細っていた。これらの中で本ものは毛皮だけであった。毛皮だけはたしかにチンのものであった。だがその純白に輝いていた美しい毛皮ですら血潮で汚されたままになっていた。（一六五頁）

剝製をリヤカーに積んでの帰途、「どうする、木村屋さん」と、「私」は後ろから声をかける。しばらくして木村屋さんは答える。

「この剝製よ、吉ンところの裏庭サ埋めたらいいんでねえか」

私は黙って聞いていた。

「チン、よっぽど和田サ帰りたかったべもんなア。帰りたいのじっと我慢してたのよ。それ考えッと不憫でなんねッ」　（中略）

「そう。それがいいかも知れん」

と私は答えた。

「それによ…」

木村屋さんは云った。

「チンも、こだな姿、残しとくの残念だべもんなァ」

それは私たちの心であった。この剝製は地上に残して置く可きではない。それは世間の人々を誤らせ、チンを永遠に辱めることになるのだ。

チンがジッと心に押えていた〝望郷〟の望みを今こそ私たちは果してやらなければならない。支那沢に近い和田では、いまごろは穴籠りの準備に忙しい秋熊が餌を漁りに近づいてくる。その忍びをチンはガラス玉の眼の底からじっと見つめるに違いない。トウモロコシ畑の隅に潜んだ吉の村田銃が月の環を射貫く音をチンは干椎茸の耳で聞きとるに違いない。

チンがその一生を懸け、どこよりも愛していた土地に、いまこそ返してやらなくてはならない。野性の土から生れた熊犬は、やはり野性の土に戻してやらなければならない。そこにチンの魂の安息があるに違いない。

「そうだ、明日、運ぼう、そして吉と三人で埋めよう。山の見えるあの土手の杉の木の下のところに…」

私は、自分自身にいい聞かすように答えた。

パアッと明るくなった。

顔を上げると鉛色の雨雲の一角が破れ、そこから射しこんだ夕陽が鎌の刃のように鋭い稜線を見せている雁戸の肩を銀色に輝かしていた。

雁戸には雪が来たのだ。（一六六～一六七頁、―線は筆者）

最終場面の描写であるが、ここにはチンの側に立った私たちの発想がある。動物に対する真の愛情ということも出来よう。ただ、それは剝製

の失敗によって、チンと私たちとの一体化の感覚が喪失した後のことであった。そのためにもたらされた必然的な心の痛みを解消するための方法でもあった。「に違いない」という表現にも、強いて自分を納得させようとする姿勢が窺われる。自己満足の域を脱していないということもいえよう。最後の情景描写がそのことを一層鮮明に裏づけているが、ともかくも動物の側に立とうとしていることは間違いない。

これに対して、先にあげた「今から考えるとこの時チンを和田村に返すべきだった」という「この時」とは、私たちの真剣な愛情がやっとチンに通じ、チンとの一体化の感覚が成立した直後のことであった。こうした折チンを和田村に返すことは、愛する者を失うという、非常な心の痛みを伴ったことであろう。それも死及び剝製の失敗からくる他律的な痛みではなく、自分の意志で自ら決する自律的な痛みであった。動物の側に立つ、真の愛情というべきものであろう。作者は、愛する者を失った心の痛みを経てはじめて、昇華された愛の認識へと到達しているということがいえよう。

三、亡びゆく種族への愛惜

作者は、チンの優秀さとそれに寄せる私たちの愛情を描くことを通して、かつての愛犬チンへの鎮魂曲を奏でている。その鎮魂の思いを濃厚たらしめているのは、チンが高安犬の純粋犬としての「最後の犬」であることにあった。作者は高安犬を求めて歩き廻った時の心境を、「私」を通して次のように語っている。

私が高安犬に強く心を惹かれたのは、一口にいえば〝亡びゆく種族〟への愛惜に外ならない。だが当時の私の気持は〝愛惜〟という言葉だけでは言い現わし得ない、もっと強い、つきつめられたものを感じていた。この〝種〟を滅してはいけない――と叫びたいような念願だったといえる。（一三八頁）

こうしてやっと発見したチンではあったが、私たちの強い念願にもかかわらず、チンは望郷の念に耐えつつ、都会の一隅でその生涯を終える。子孫を残せなかったばかりか、そのりっぱな姿をもこの世にとどめることが出来なかった。チンへの鎮魂の思いは、この「亡びゆく種族への愛惜」の情と重なって、この作品の主要なモチーフとなっている。

私が高安犬に思いを寄せるようになった源流には、生来の資質としての動物好きの上に、古生物の世界に対する強い興味・憧れがあった。

生きた動物の好きだった私が〝絶滅した種〟を研究する古生物学に興味を持つようになったのは、科学博物館に勤めていた従兄に負うところが多い。従兄はここで地質学部門を担当していたのだが、ある夏帰省したおり、中学生の私にいまから何千万年という昔、地球上をわがもの顔に歩き廻っていた巨大な竜の話をしてくれた。その印象は強く私の脳裏に刻み込まれた。私は小遣を貯めてはそういった参考書を買い集め〝失われたる世界〟に遠く想を走らせるのだった。（一三八～一三九頁）

「失われたる世界」への夢とロマン、「絶滅した種」への関心は、やがて私を山犬（日本産の小型狼）探しに没頭させた。学友尾関の紹介で、山犬への関心は日本犬へと移っていったが、高安犬探しに誘われた時の「私」の心境は次のように書かれている。

高安犬――それがどんな犬だか私は知らなかったが、絶滅に瀕している犬種という言葉は私の胸に強く響いた。（一四一頁）

こうして高安犬探しの進行とともに「亡びゆく種族への愛惜」は形成され、この作品のモチーフとなっていくのであるが、その源流に「失われたる世界」、つまり原始への作者の憧憬を見出すのである。

作者の原始への憧憬は、高安犬チンの描写を通しても推測することが出来る。

山形県、新潟県、宮城県と境を接するあたり――朝日に始まり蔵王に終る峻嶮なる山岳地帯は奥羽の屋根と呼ばれ、人間の侵入にはげしく抵抗する原生林で蔽われている。

「支那沢」や「熊の沢」、また「中津川渓谷」や「帰らずの沢」はその一つで、もちろん五万分の一の地図にも掲っていない。岩壁は眉に迫り、皮くるみ、ぶな、どろ柳、しもふり松、山うるし、はぜ、山すもも、しゃくなげの密林は巓から吹き下してくる強い山風のために根曲りに這って雪のない季節には猟師ですらも入って行けなかった。おまけにここにはあけびや山ぶどう、山いちごなどが山の獣たちのために豊富にあった。そこで熊の巣窟であるこの一帯は同時にアオシシ(羚羊)、猿、マミ(穴熊)、ムジナ(狸)、狐、テン、ヨブスマ(むささび)などの野獣にとっても安全な天国であった。

ただ一人、例外の人間がいた。それが吉だった。彼はこれらの沢や谷を自分の所有地のように歩き廻った。(中略)吉はこの〝原始〟のために生れ、育ち、鍛えられた人間だった。そして彼はここで生れたチンをここで育て、ここで鍛えた。(一四六頁、――線は筆者)

チンの生まれ育ってきた場所についての説明であるが、吉蔵との生活ぶりについては、次のようにも書かれている。

彼はチンだけを伴って、山に入った。古いスキー帽に羚羊皮の雪除けを身にまとい、御幣餅、蛸干、数の子、塩を腰袋に入れただけの軽装で、幾晩も、幾晩も雪山を放浪した。兎をナタでぶった切りにして犬と共に食い、焚火の傍にまどろんだ。凍りついた星空、ゴーッという山鳴り、熊男は原始の中に救いを求めていたに違いない。(一四九頁、――線は筆者)

更にチンを形容する用語として、「酷しい野性の生活の中にあってはじめて備わった威厳と品格」(一五一頁)、「自然児チン」(一五八頁)、「野性の土から生まれた熊犬」(一六六頁)といったものが目立つ。チンは、「原始・野性・自然児」といった用語によって特徴づけられている。そのチンへの鎮魂曲「亡びゆく種族への愛惜」は、「失われたる世界」への作者の憧憬を示し、文明に対する原始への志向性を持ったものとして位置づけることが出来よう。

おわりに

「高安犬物語」創作のモチーフを「亡びゆく種族への愛惜」ととらえ、そこに作者の文明に対する原始への憧れの姿勢を見てきたが、これは以後の戸川の作品の特質を形づくっていく。絶滅に瀕している野生動物を求めての原始への旅は、北から南へと日本列島を縦断し、その土地に取材した数多くの作品を残している。イリオモテヤマネコとの出会いも又、そこにあった。その足は必然的に海外にも延び、グリーンランド、ガラパゴス群島、インド、アフリカへと幅広い。特にアフリカは、戸川にとって「世界の故郷」[3]と位置づけられ、原始・野性への憧れを満たし人間を照射し、文明の行方を黙示する所として認識されている。[3]

ところで作者は、「なぜ動物小説を書くのか」という自らの設問に答える形で、次のように述べている。

動物が好きだからだ、というよりも、狭い日本国土の中で、人間に次第に追いつめられて、滅亡しつつある野性の動物たちに限りない愛着を覚えるからである。(中略)

開発されて山奥へ、山奥へと逃げまどいながら、しかも不必要に殺されてゆく哀れな動物たち、彼らにだって生きる権利はあるはずであ

る。人間だからといって不当に、不必要に、その生命を奪っていいということはあるまい。

動物の小説を私が書きつづけるのは、一人でも多くの人々に、自分が生れた同じ国土がもっている尊い生命――動物たち――のことを思いやってほしいという願望からである。(4)

このようなバックボーンを基盤として、野生動物の保護、野生動物との共生を願う戸川の数多くの動物小説は生みだされていくのであるが、「高安犬物語」には、こうした認識はまだ形成されていない。しかし、戸川の動物の側に立った動物への真の愛情と、亡びゆく種族への愛惜・原始への憧憬の結びつくところ、こうした認識への到達は必然のことであったであろう。ここに、戸川動物文学の原型としての「高安犬物語」の特質を見出すことが出来る。更に亡びゆく種族へ涙する作者の心は、動物の中でも弱いものや雑種への理解・愛情へと広がりを見せていくが、「高安犬物語」からの発展の諸相については稿を改めたい。

(4) 朝日新聞「わが小説」欄（一九六二・二・七）

（一九九一年一〇月一一日受理）

注および引用文献

「高安犬物語」の引用本文は、『戸川幸夫動物文学全集』1（講談社、一九七六・五）によった。読みがなは特殊なものを除いて省略した。

(1) 『戸川幸夫動物文学全集』1（尾崎秀樹解説）等参照

(2) 最初に「私」が吉蔵の家へ訪ねた時には、チンの入手は無理でも交配には応ずるかも知れないと思っている。

(3) 『動物のアフリカ』（講談社、一九六七・十一）「アフリカは世界の故郷」の章参照